

高尾山 歴史の散歩道

明治大学博物館

外山

徹

43

大師堂その1

大本堂から左手へ飯繩権現社に登る石の階段とは反対側にも、鐘樓堂、愛染堂、聖天堂といった近年に再建ないし建立された諸堂が、ひしめくように建ち並んでいる。その一番奥にあるのが大師堂である。宝形造りの屋根の庇が美しく張り出した端正な堂は、山内でも古くから残存する一つで、かつては大日堂として薬師堂（現存せず）・護摩堂（現奥之院不動堂）とともに、現在の大本堂の位置に伽藍を形成していた。大本堂の建立にあたって、現在地に移築された頃、大師堂と名称も変更されたようだ。

弘法大師空海

高尾山の開基は年代的に真言宗の立宗に先立つのだが、醍醐寺から下向した俊源による中興以来、真言宗の法流に属することになる（明治に入り智山派に付属）。

薬王院の法脈を辿ると、俊源の師俊盛は醍醐寺無量寿院の正嫡である。無量寿院は三宝院座主元海が開創した院家で、その醍醐寺の開祖が聖宝。聖宝が師事した真雅は空海の実弟であり弟子ということになる。天長二年（八二五）付の空海から真雅に宛てた印信（秘法伝授



真言宗の宗祖 弘法大師空海

の証書)の写しが薬王院文書に残るのは、これが醍醐派への空海からの法流継承の始源を示すものであること、すなわち宗祖としての空海を多分に意識したものであろう。では、その空海の人となりを簡単に紹介しよう。

空海は、宝亀五年（七四四）、讃岐国（香川県）多度郡弘田郷（善通寺市）の地方豪族（佐伯氏）の家に出生した。少年期に上京して学修の道に入り、大学まで進むが、官吏への道をよしとせず、仏道

を志す。私度僧として山野に修行の場を求め、やがて四国に戻って各地で修行に励んだ。平安京に移っていた都へ戻るのが、延暦二六年（七九七）のこと。

舶来の仏典に触れ、未知の教義への関心止みがたく、中国渡航の機会を探るが、私度僧の身分では遣唐使への随行が許されず正式な出家の時期は渡航間際のこととされる。延暦二三年（八〇四）、念願の中国渡航が実現した。唐の都長安にて青竜

寺の僧惠果に師事して足かけ三年の間、密教の奥義を学んだ。大同元年（八〇六）、經典や図画を携えて帰国。しばらくの九州滞在の後、平安京に帰着。当初は高雄山寺に入り、後、乙訓寺に移る間、自己の思想を整理・体系化し、教義としてまとめることに努めた。

弘仁七年（八一六）、高野山に道場建立の土地を下賜され、これが真言宗の本山、金剛峯寺の開基となる。同一四年には官立寺院であった東寺を給

預し、都近くに真言密教の道場を開創することになった。天長五年（八二八）には綜芸種智院を設立して広く教育の門戸を開き、生涯を通して多くの教義書を著した。承和二年（八三五）三月二日、高野山にて入定。

なお、空海入定の二百年余の後、覚鑿（興教大師）が大伝法院を高野山から根来の地に移し（一四〇）、根来山根来寺の開創となる。その塔頭の一つである智積院は、豊臣秀吉による焼き討ち（一五八五）を機に京都へ移転し、江戸期には新義真言宗の学林として多くの学僧を集めた。

弘法大師御影供の執行

空海の忌日である三月二日に執行される御影供（肖像を掲げた法会）は、高尾山においては享保四年（一七一九）が管見される一番古い記録となるが、実際にはその以前から執行されていたことが推測される。関東でも、

地方本寺の許に一門寺院がうち揃って執行されていた事例が江戸時代の早い時期から確認でき、真言宗寺院にとつては一門の結束を再確認する年間で最も重要な行事とされていた。享保の御影供の記録によると、高尾山主と末寺住職ら十一名の僧侶が結衆となり御影供を執行している。

江戸後期の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』（文政五年・一八二二）には御影供についての具体的な記事がある。年々三月廿一日祭事あり。これを御影供と号す。翌る廿二日大般若を転読す。この二日遠近の人頗る群集す。『風土記稿』編さんに関わった八王子千人同心植田孟縉の私撰による『武蔵名勝図会』では若干異同もある。

般若執行。この両日近郷遠里より参詣群衆せり。享保四年の執行にあたっては、麓の村人が臨時に宮番や札所の係を務めており、たまたま残っている享保元年における月別の参銭額の一覧は三月が突出して多いので、すでに江戸中期のその頃には法類一門による儀礼という性格に加え、大勢の参詣者が訪れる祭事として執行されていたようだ。その後、御影供は最大の祭事として多くの人々を集め続ける。麓の村の旧家の日記には、享保一八年三月二一日の記事に「おびただしき高尾参り」とあり、先の参銭額の件がやはり御影供の執行による参詣者数に裏付けられていることがわかる。延享四年（一七四七）には「終に無き高尾参りござさうろう」、宝暦五年（一七五五）にも「おびただしき高尾参り」、以降、同九年、安永六年（一七七七）、天明

六年（一七八六）、同八年、寛政二年（一七九〇）と同様の記述が続く。『風土記稿』編さんの時期に至る。御影供から春季大祭へ。明治を迎え、三年（一八九〇）に執行された居開帳の折の記録の中には、四月二一日の記事として「例年の通り玄関より行列せり、又稚子は八王子町三富の周旋にて四人登山の事」(衆人は九名なり)とある。規模こそ違え、現在の春季大祭におけるパレードと同様の行事がすでに行われていた様子がわかる。この四月二一日の行事について、『高尾山誌』(昭和二年・一九二七)は「御影供会」とする。翌二二日の大般若執行も記載しているが、これは『風土記稿』の記事に類似するものの月がひと月違う。旧暦の三月二一日は、現在ならば四月の下旬から五月の初旬にあたるので、新暦への切り替え(明治

六年から)後、ある時期から御影供の日取りを陽気に合わせて一ヶ月ずらして祭事の日と定めたようだ。現在、三月二一日および月並の二一日は飯繩大権現の縁日となっているが、『名勝図会』によれば、元来、御影供と飯繩大権現の祭礼は同日におこなわれていた。江戸期には大師御影供が執行されていたであろう。同じ季節、例年四月の第三日曜日に春季大祭が執行されていることは、古の最大の祭事を今に引き継ぐものと言えらる。春の陽光に当時の賑わいを偲びつつ、それが宗祖を偲ぶ祭事に由来することを思い起こしたい。

おことわり 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。《参考文献》高木神元「空海 生涯とその周辺」(吉川弘文館、一九九七)